

昭和十八年の石川淳の文芸時評について

狩野, 啓子
筑紫女学園短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12048>

出版情報 : 語文研究. 52/53, pp.107-113, 1982-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

昭和十八年の石川淳の文芸時評について

狩野啓子

石川淳は昭和四十四年十二月に開始した朝日新聞文芸時評の劈頭を、

文芸時評というものは、わたしはまだ一度も書いたことがなく、読んでみたことすらじつはめったにない。それを今からはじめようとするのはただ風の吹きまわしというばかり。毎月の雑誌に発表される作品はうんざりするほど数が多いのだから、とても一つ一つ付合っではいられない。また雑誌体制べったりでは、どうも鼻がつかえて、今日の文芸に窮屈なおもいをさせるのではないか。——中略——雑誌をつかず離れず、事の雅俗を問わず、自然のながれのままに、すなわちわたしの勝手気ままになくれとなく書くことにする。(傍点引用者)

というノンシャランな前置で始めている。ここで八まだ一度も書いたことがなく、とされている文芸時評を、石川淳は戦前、雑誌に連載したことがある。三笠書房から刊行されていた「文庫」の三巻一

二三号(昭18・1~3)に掲載されたそれである。順次、「生活と言葉」「記号と言葉」「概念と言葉」と題されている。八と言葉で統一され、八—文芸時評—と銘打たれている所から、一定期間の連載予定が三号までで中断されたのではないかと推測される。最後の「概念と言葉」は、

火鉢の炭をつきたしながら雑誌を読んでいると、炭の燃え立って青い炎のうに心がひきこまれて行つて、雑誌のうがお留守になる。必ずしも雑誌の記事がつまらないといふわけではなく、また評を書くのが太だしくおつくうだというわけでもない。しかし、今日の雑誌系に起伏する文学的諸事件の性質と、それに応接するわたし自身の心情とのあひだの辻れ工合を、いつかわたしは炭の炎の中で調整してゐるかのごとくである。炎には言葉がない。従つて言葉に対応する概念がちらちらない。いはば、わたしはここで無限と交渉してゐる。それでも雑誌を抛り出したのではないのだから、わたしにもまだ娑婆気があつて、炎の中と雑誌系のとの双方に籍を置いてゐる恰好である。すると、わたしの心情は今この双方の世界に焦点をもつところの楕円軌道の上を運動して

ゐることになる。時評家の資格十分だらう。ところで、かうして炭をつぐ合間に雑誌を読みながら、評を書かうなどとしてゐるわたしといふものは、これまた太だ今日の文壇の現象に属するに相違ない。何を書くつもりか知れたものではない。時評家の資格皆無だらう。

時評家の資格などがあらうとなからうと、今かうしてゐるわたしの心情の状態には変りがない。すなはち、わたしは既に自然と存在との調和を交の中に托してあるのだから、当月の雑誌系に罷り出る作品現象に対しては、一々丹念にこれと付合ふといふ労役から自分を解放してゐる。(傍点引用者)

と書き起こされている。二十数年を隔てていとはいえ、これら二つの文芸時評の傍点箇所に見られる共通性は明白であり、△時評△に取り組む際のこの作家の姿勢の一端が窺われる。

ところで、昭和十八年の文芸時評に顕著なのは、△今日の雑誌系に起伏する諸事件△に接続する石川淳自身の△心情△のユラギである。この時期の石川淳を論じた優れた論稿に青柳達雄氏の「文学大概」前後の戦術^(註)があるが、青柳氏の言う△一口に芸術抵抗派と言つても、その後の戦時体制の強化に伴う後退の仕方なら経過の内実は必ずしも一様ではなかったはずである。△という問題意識に立って、これらの文芸時評に検討を加え、戦時中の石川淳をより正確に知る手がかりとしたい。

二

「生活と言葉——文芸時評——」(昭18・1)で取り上げられてい

るのは、長谷川如是閑の「民族的生活の精神性」(「日本評論」昭17・12)である。石川淳は、この文章が理路整然としていながら、読者を感じさせないと批判する。その理由として、読者がこの文章を通して△論者の頭脳としか交渉しない△ことを述べ、△論者自身の生活エネルギー△と△享受者側の心の流れ△が△うまく聯絡がとれないやうな工合である。△と感想を述べる。「文学大概」(小学館 昭17・8)で示された小説方法論の適用であることは言うまでもない。統一して如是閑の「言葉を語ることは、即ち多少とも「論理的」であることであり、「合理的」であることである。「言挙げ」といふ邦語が、俗にいふ「理窟ほい」と同義とされてゐるのは、その理由である。」という文章を引き、△われわれはコトアゲが俗にいふ理窟ほいと同義だとは思つてゐない。コトアゲに於ける啓示と、俗にいふ理窟ほさに於ける思想とは、発想の仕方が全然ちがつてゐる。△と否定する。

ここで「言挙げ」が「コトアゲ」に変わった時点から、石川淳自身の「コトアゲ論」が展開されるのである。「直隼盟」の宜長のコトアゲ、「古の大御世」には、道といふ言挙もさらになかりき。(中略)物のことわりあるべきすべ、萬の教へごとをしも、何の道くれの道といふことは、異国のさたなり。」を引いて、次のように論ずる。その宜長のコトアゲは何のためか。すなはち、異国渡米の思想質問とその方法に対して、皇朝の道を宣揚することである。コトアゲに於ける言葉の構成は異国の思弁の仕方に依つて導かれることがない。さういふ思弁法も併せて否定されてゐる。——中略——充実した生活の流が十善であつて、言葉に依る理論体系にしがみつくのは異邦人の精神だと突つ放してゐるやうなあんばいである。

宣長の言う「皇朝の道」は「高御産巢日神の御靈」によりて、世ノ中にあらゆる事も物も、皆悉に此大神のみたまより成る所の「神の道」を指しているので、西洋流の解釈で割り切つてはならない、とする。「上古には道といふ言葉がなかつたところの、この神の道といふ光は自然と生活とをつらぬいて、日本人の精神の運動する極限であつた。Vと、神の道Vを「精神の運動」に結びつけている。

続いて引き合いに出された空海の「三教指帰」については、「論理の建築」ではなく「コトアゲ文字」であつたという。初めから仏教が儒老二者に勝つように仕掛けられている「三教指帰」とは、元來論理とは無縁の文学とされるのである。

ここで展開されるコトアゲ論は、最後は「歌」の論に収斂されていく。

宣長のコトアゲが百首の歌にうたひ上げられてゐるのは、作者の意図のしわざといふよりも、日本人として最も自然な発想法の作用なのだらう。生活から自然に向つておくる通信として、日本の言葉は歌の形を取るほかにやうに柔軟である。実際には、生活と自然とは心に於て一元的に調和されてゐて、そこが精神の運動を起す極に當つてゐるといふけしきである。日本人ほど心と精神との距離が近接してゐる例は異邦に求めたいだらう。非常の場合、その距離はすぐゼロと置かれてしまふほど小さい。けれど、どんな波長をもつた精神が異邦から輸入されて来たにしろ、この国土では宣長のいはゆる神の道が速さの限界になつてゐる功德だと思ふほかない。この時、言葉はどうして長たらしく喋りつづけられなくてはならないか。われわれの祖先がコトアゲすると、それがたった三十一字にしかならなかつたとは、美しい宿命であ

る。——略——

コトアゲセズとは、まさしく合理主義の否定である。上古には道といふものが無かつたやうに、われわれの遠い祖先の歌はそもそも合理主義などといふ不潔なもの何たるかを知らずにゐた。歌が理に落ちて来たのは、後世の生活の墮落である。心の固定に対応して、言葉は歌様式の中で死んだのだらう。そして、思想の流行といふいやらしい現象が起ることになる。しかし、コトアゲセズといふ陳述が直ちに歌になるやうな上古の武人の心は、依然としてわれわれの生活の源泉である。いさぎよい生活の根が絶えな

いかぎり、風の吹き廻しで文学が少しくらゐるにこつて見えても気にすることはない。

引用が長くなつたが、「生活と言葉」の文脈を辿ると、合理主義の否定、近代の超克、皇朝の道の宣揚、西洋の否定といった当時の日本主義と軌を一にするやうな印象を受けることは否めない。「マリスの歌」（「文学界」昭13・1）を書き、「文学大概」で西欧の最先端の文学論を消化した独自の小説方法論を表わし、「森岡外」三笠書房 昭16・12）に於いては、抒情詩人の悲劇を剔抉して見せた石川淳とこの印象とは、どうつながるのであろうか。この時評発表の直前の昭和十七年十一月に行われた「第一回大東亞文学者大会」に強い嫌悪を示した石川淳と結びつけることができるだらうか。或いは又、「全篇ゴマカシのためのレトリックを駆使した文章V、Aゴマカシ、巧妙なウソによる反噬Vと理解し、A時代の圧迫に対処VするためにA石川淳とつた戦術Vと見做すべきなのか。」
「民族的生活の精神性」というA時宜に適したV文章を対象として、石川淳は「生活と言葉」で非常に微妙な境界に踏み込んでい

る。文中、確かに迎合に近いような△ゴマカシ▽がないとは言えない。日本讀美と、対照的な殊更の西洋否定などはその一例である。しかしこの場合でも、単なるレトリック上のゴマカシではなく、従来からの考えを増幅させた面もある。例えば異邦性を弾き出してしまふ日本の風土とは、「白描」の小説的テーマでもあったはずである。又、宣長を論ずる文章に熱が籠っているのは、石川淳にとって宣長が△戰術的に好都合▽（筑摩叢書「渡辺華山」）「後記」昭39・

3）なだけの人物ではなく、△感動▽を受け親しみを感じていた人物だったからだと思われる。当時、国粹主義的な人々から特殊な位置に押し上げられていた宣長を熱意を籠めて論じているだけでも、一種の誤解（意図的なものであったにせよ）を生じたであろう。石川淳が宣長を通してこの文章で伝えようとしているのは、△現在のわれわれ▽の△生活の源泉▽として、△上古▽の心、即ち合理主義とは無縁の古代日本人の精神的エネルギーに直結しようということであつて、知識人を否定し、野蛮人として生きることを称揚して以後に形成されたエネルギー論を基礎とする文学方法論と、矛盾するものではない。「文学・昭和十年代を聞く」（文学的立場編、剗草書房 昭和51・10）中の△はくの感じからいふとね、ジイドという人は理屈が勝っているんだな。なんでも理屈でやっているでしょう。あれが嫌いなのですよ。▽という発言も、△合理主義の否定▽に重なり合うもので、石川淳に一貫した発想だと言えよう。

以上考察したように、「生活と言葉」が単なる時局に対処するための△ゴマカシ▽とは言えないが、それでもなお、当時の△現象▽に承接する石川淳の△心情▽に何処かバランスを欠く印象を受けるのは何故だろうか。それは、石川淳が宣長に熱を入れたあまり、

△歌▽に重心をかけた所から生じる印象だと思われる。石川淳の方法からするならば、△歌▽を過去のものとし△散文小説▽こそ称揚すべきである筈なのに、小説に関しては、

たしかに、小説といふ咄咄怪事は末の世に起つた出来事である。小説の話こそわたしの役柄らしいが、ここはその場所でない。我家の小説論は風邪を引かせないやうに、しばらく机の抽出の中にしまつておく。

と遠慮がちに述べられているだけである。「白描」の結末部で、花笠武吉が、手紙と手帖とペンを△抽出の底深く投げこんでしまつた。▽という場面を想起させられる。△歌▽の季節にあつて、外界の△嵐▽から自己を遮断するだけでも難事であつたことが窺われる。

三

「記号と言葉——文芸時評——」（昭18・2）では、一見文芸時評とは関係のなさそうな△乾隆の印譜▽の美しさを考えることから論を始めている。△印譜▽に刻まれた文字は△その意味をもつて一本立に通用してゐるのではない▽のであつて、△印譜全体を領してゐるのは、気韻といふものなだらう。そして、気韻とは觀念ではなく、精神の運動の作用に依つて生じた磁場のやうなものなだらう▽といふ。△もしこの場に至つた精神の運動を記述しようとするば、もうふつうの言葉では間に合はず、おそらく無限級数のやうな記号式の形を發明しなくてはならないだらう。▽そして△印譜はさういふ記号式に相当してゐる▽と言ひ、△気韻系の記号式▽と呼

ぶ。その△気韻系の記号式▽に对照させて△散文▽を論じていくのである。以下の散文論は「文学大概」のそれと殆んど重なっている。

言葉が神助を蒙らずに、また人間的なすべての思想よりも速く、いはばひとりで、われわれが観察する自然一般に於ける事物の流転と近似的に疾走することを知らずには、近代の散文形式の發明まで待たなくてはならなかつた。純粹精神といふやつを確かにつかまへたといふ実例はあまり見あたらないにしろ、精神が言葉に於て運動する極限として、われわれに与へられた形式は散文以外にはない。——中略——散文に於ける小説的努力の性質は単純なものではあるが、ときどき今日の時間を導入して作品といふ形に収斂しつつ、同時にそこを極として運動が持続されて行くふせいで、操作的には複雑微妙な相好を呈してゐる。

以上のような対比的本質論を前置にして、この号で取り上げているのは「日本人の神と信仰について」（座談会）（「文学界」昭18・1）である。六人の話者の中から特に林房雄、亀井勝一郎の神仏論をクローズアップして、△われわれが林、亀井を通して相手にしてゐるものは、神仏ではなくて、林、亀井自身の信念の強さにはかならない。▽と言ひ、それは△悲願的気概▽という△人間的なものからの抽象▽だと論じている。この△悲願的気概▽と地上で対称に當っているものとして△印譜に於ける気韻▽を挙げる。△かれらの言葉はしばしば氣持、情熱、信念の記号的表現▽で、この△記号▽性に於いて両者は一致するのである。

この「記号と言葉」からは、前回の時評のような均衡を欠いた印象は受けない。林、亀井を△文人墨客▽といひ、△わたしの趣味からいへば、珍重至極である。▽としながらも、ここでの石川淳の面

貌は明らかに散文家のそれなので、論ずる対象に、官長ほどの親近感を持つていないことも、原因となつてゐるのであろう。前回とは大きく異なる反語的精神が認められる。座談会全体について述べた△この談論の内容に対応するものは、発言者の個別的な思念もしくは情熱の総和ではなく、今日の現勢上に於けるわれわれの運動の仕方にはかならない▽という箇所は彼の△心情▽が表われている。

四

「概念と言葉——文芸時評——」（昭18・3）では、一に引用した前置のあと、島崎藤村の「東方の門」（「中央公論」昭18・1）10）を取り上げている。まだ連載が始まつたばかりだが、△評判はおほむね賞讃に満ちてゐる。▽このような文壇の通評は、△今日も前月も前々月も、いや数年前から大切にあたためて来た藤村概念の親愛なるものがあつて、お待ちかねの作品が出て来ると大いそぎでその上を飛びまたがり、嬉々として春風に駒を行るのていである。▽と辛辣に揶揄している。「東方の門」序章は△難渋なくきれいに読めて、読んだ後に何も苦勞のたねを残してくれないやうな雄弁宏辞である▽という。愛読者なら喜ぶかもしれない△このせつかくの美文▽を△内容空疎ならしめてゐる▽のは、△今月流行の歴史小説概念にほかならない。作者に即していへば、明らかに意識されたものと推される通俗歴史理念である▽として、論点は歴史小説概念に移つていく。

今日、通俗歴史観と通俗小説観とを何の苦もなく一つに纏めて、作家に輕業の仕事場を提供するところの歴史小説といふ概念が世

に行はれてゐる。これに時勢意識といふ身につまされたものが合
体すれば鬼に金棒である。

と、当時流行の歴史小説を批判する。藤村は、元来△構成の詩人△
であつて、△直観と解析とが同時に進行すべき散文の約束から
は√縁遠いのであるが、それでも、△意想の中の構成を詩心の運動
に依つて塗り上げて行く△ことによつて文学を生みだしていた。し
かし、「東方の門」序章では△通俗歴史理念△が△構成に干渉△し、
△わるくするとそれが今後詩心の運動の支配権を握つて放さない△
ような形勢が見えると言う。

われわれはただ特定の概念の司令下に徴集され濫費され踏使され
るところの、おびただしい言葉の運命について、いささか傷心の
思ひがするといふだけである。やはり言葉はむだに殺さないはう
がよい。

として、通俗歴史理念が強すぎて、藤村詩語を殺すことを懸念して
いるのである。ここで説かれてゐる、概念や思想等に小説を従属さ
せてはならないという考えは、石川淳の方法論の当然の帰結である
が、△歴史小説△への反撥は、もっと具体的な激しい衝動に駆られ
て生じたものであつた。前年七月に、石川淳は「散文小史。一名、
歴史小説はよせ。」と題するエッセイを「新潮」に発表してゐる。
このエッセイに触れて、「戦中遺文」の前文で、

この年五月にはすでに文学報告会といふものがでつちあげられ
て、文章は経國の大業か、下男の下ばたらきか、ナニガナンデモ
奉公しろと、壮士が演舌をぶちまくつてゐたところであつた。売文
業者は書くものに窮して歴史小説と称する珍種の栽培のはうにか
たむきかけたが、わたしも業者の一人として、渡辺華山の伝記を

おとな用と子ども用と二冊作る仕儀になつた。——中略——どうもわ
たしは文中いやに殺氣だつて馬琴をのしることににはなはだ急で
あつたと、今はかへりみられる。——中略——じつは、当時わたし
は馬琴に於て他の一箇の敵を見てゐた。軍政府発行の道義といふ
やつである。道義と奉公との二ツ玉をくらつたせむか、わたしは
むらむらと殺氣だつてゐたものらしい。

と述べてゐる。即ち、時評に言う△通俗歴史理念△の具体的内容と
して、△軍政府発行の道義△が考えられる。又、「文学大概」所収
の「歴史と文学」に於いては、△歴史△が作られていく時に働く
△モラル△に対して、強い不信感を表明している。△或る歴史家の
仕事△が公認される時、そゝに書かれた歴史が本當の歴史だと折紙を
付けられる。公認する者は歴史家と同時代の、もしくは後の時代
の人間群である。すなはち、それは時代のモラルと歴史家のモラル
とが一致したといふことだ。時代のモラルの合意、追認のうへに、
書かれた歴史がそれ以外には歴史がないかのやうに、成立を許され
る。そこに髣髴する過去の社会像が現在の社会の註文から逸脱しな
いものと見られる。△と述べ、△歴史が本當だといふ時、その本當
さ加減は、さうに違ひないと決めてゐる人間の信念の強さに比例す
る。信念が強くなるに従つて、歴史はさつさと嘘のはうへ流れて行
くであらう。△と結論する。「概念と言葉」に於ける△歴史小説△
批判は、以上見てきたやうに当時の流行現象に対する批判なのであ
る。絶望的情勢の中にあつてなお、石川淳は次のやうに書きつけて
ゐる。

しかし、強い概念の力を打ち破るものは、弱い言葉のはたらき
よりほかにはない。言葉の微妙柔軟なる性質は概念の制圧下に甘

んじてばかりもゐないだらう。歴史小説概念に駆り出されて続々と言葉が流れて行く途中にも、いついかなる椿事が勃発しないものでもあるまいと、さしあたり楽観しておきたい。

強靱な散文精神を武器にした戦いの仕掛が、この文章から看取できる。ここで言う弱さの強さをテーマとしたエッセイが「柳の説」(「文庫」昭17・9)であった。柳の様々な用例を引いた後、石川淳は、

柳に難辭をつけようとする量見は、すなはち弱いものと見たらばすぐ取つて食はうといふさもしい量見なのだらう。但、柳の強弱はだれも知らないのだから、取つて食はうとする側が果してみづから信じこんでゐるほど強いものであるかどうか判らない。柳のうはべの弱さは、実は詩語の作用の中にしかない。——中略——柳の見かけの弱さは、そこに道義説とか無用論とかを押しつけようとする俗世間の強者をして、強さを意識させる據りどころである。既に柳の弱さが見かけのものだとすれば、それに付けこむ強者の強さもまた見かけのものたるに過ぎない。だが、強者意識ほど思想の力にもたれたがるものはない。柳は柔弱で輕薄で役に立たんときめつけるのも、おれはまつたうで強いとひとり合点にきめこむのも、信じこまれた思想の力のはたらきとしては一つことである。

と、憤りの感じられる強い口調で述べている。既に早く石川淳には「普賢とはわたしにとつて言葉である」という確信があった。(「普賢」「作品」昭11・6〜9)その「言葉」のはたらきを以て「強い概念の力を打ち破ろうとした戦中の石川淳の努力は大いに認められるべきである。しかし、その努力の線上に石川淳自身が認める所

の多少の「ユガミ」が無かつた訳ではない。「ユガミ」或いは「心情」のユラギは、外圧に屈した結果の「ゴマカシ」/「ウソ」と、肉面的な資質から生ずるユラギとがある。浪漫派の資質を持つ作家であるだけに、戦時中に感じていた危機意識は、一層複雑微妙なものであつたので、そのことは、これら昭和十八年の文芸時評の中でも特に「生活と言葉」からよく看取されるのである。

註

- (1) 青柳達雄「石川淳の文学」(笠間書院 昭53・8)
- (2) 同右
- (3) 同右
- (4) 「シャルル・ルイ・フィリップの一語」(「日本詩人」大11・12)
- (5) 「新潮」昭35・5、のち「東斎雜書」所収(筑摩書房 昭35・6)
- (6) 拙稿「戦前の石川淳における抒情否定のモチーフをめぐって」評論「森岡外」を中心に(「語文研究」44・45 昭53・6)で論じたことがある。